

古典文法 助動詞⑤ 「す、さす、しむ」

文法的意味

す・さす・しむ	「使役」――させる
「尊敬」	「――なさる、お――になる」

見分け方

・「す、さす、しむ」 単独	↓「使役」
・「す、さす、しむ」＋「給ふ、おはします、らる」 ↓「尊敬」	

軍記物の「す、さす」

平家物語、太平記などの軍記物では、使役の「す、さす」を受身に訳すことがある。

(例)馬の腹射^のさせて引き退く ↓訳「射られて」

【練習1】 傍線部を口語訳し、そこに含まれる助動詞「す、さす、しむ」を文法的に説明せよ。

(例文)風波やまねば

(口語訳)止まないいで (文法的説明)打消の助動詞「ず」の已然形。

1 妻^めの 姫^{おうな あづ}に 預^{やしな}けて 養^{やしな}はす。

(竹取の翁^{おきな}は、かぐや姫を)妻のおばあさんに預けて育てさせる。〈竹取〉

2 聊^{いささか}か 嘗^なめ 給^{たま}ひて、 少^{すこ}し 形^{かたみ}見^みとて 脱^ぬぎ 置^おく 衣^{きぬ}に 包^{つつ}まむ とすれば、 在^ある 天^{てん}人^{にん} 包^{つつ}ま^せず。

ず 打消の助動詞「ず」の終止形。――ない

(かぐや姫は不死の薬を)ちよつとなめなさつて、少し(地球に置いていく)形見にと思つて脱ぎ置く衣服に包もうとすると、そこにいる天人が――。〈竹取〉

3 女^{むすめ}どもに 詠^よま^すれど、「まろは、まして物^{もの}も 覚^{おぼ}えず。」とて 居^ゐたれば

ども 複数を表す接尾語。―たち 詠む 和歌を作る。ここでは男に對する返事の和歌を作ること ど 逆接の接続助詞。―けれども

(男が和歌を詠んだので)――、(娘たちは)「私もどう(和歌を)返していいか分からない。」と言つてじつといるので(源氏・玉鬘)

4 此の子いと大きに成りぬれば、名を三室戸齋部のあきたを呼びて付けさす。

5 人を遣りつつ求めさすれどさらに無し。
求む 探す ど 逆接の接続助詞。―けれども

6 「我に暫時の暇を得させよ。我が最愛の後の琴の音を今一度聞かん。」と 暫時しばらく 暇時間・猶予

7 大方生ける物を殺し傷め、鬪はしめて遊び楽しまん人は、畜生残害の類なり。

8 生を苦しめて目を喜ばしむるは、桀紂が心なり。

9 身を破るよりも、心を痛ましむるは、人を害ふ事なほ甚だし。 痛む 傷つける・苦しめる

10 御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。
給ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる

この子がたいそう大きくなったので、名前を、三室戸齋部の秋田を呼んで――。〈竹取〉

人を派遣しては――、全く見つからない。〈大和〉

始皇帝が「――。我が最愛の後の琴の音色をもう一度だけ聞きたい。」と〈平家〉

だいたい生きている物を殺し傷つけ、(或いは互いに)――、それで遊び楽しむような人は、互いに噛み合い傷つけ合う動物と同類である。〈徒然〉

生き物を苦しめることで自分の目を――、中国の古代の暴君である桀王、紂王と同じ心の持ち主である。〈徒然〉

身体を傷つけるよりも、――、人に害を与える程度が甚だしい。〈徒然〉

清少納言が簾を高く上げたところ、中宮定子は――。〈枕〉

11 「朕^{われ}をば謀^{はか}るなりけり。」とてこそ泣^なかせ給^{たま}ひけれ。
給ふ尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる くれ 過去の助動詞「けり」の已然形。―た

12 「君^{きみ}は彼の松原^{まつばら}へ入^いらせ給^{たま}へ。兼平^{かねひら}は此^この敵^{かたき}防^ふぎ候^{さふら}はん。」 給ふ尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる

13 この帝^{みかど}、天徳三年己未三月二日、生^うれさせ給^{たま}ふ。
給ふ尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる

14 此^この姫君^{ひめぎみ}と上^{うへ}の御方^{おんかた}の姫君^{ひめぎみ}と、貝合^{かひあはせ}させ給^{たま}はむとて、月頃^{つきころ}いみじく集^{あつ}めさせ給^{たま}ふに、
貝合 訳はそのまま。左右二組に分かれて貝の美しさ珍しさを競う遊び 給ふ尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる む 意志の助動詞「む」の終止形。―しよう

15 この大臣^{おとど}の作^{つく}らしめ給^{たま}へりける詩^{うた}を帝^{みかど}かしこく感^{かん}じ給^{たま}ひて、
給ふ尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる り 完了の助動詞「り」の連用形。―た ける 過去の助動詞「けり」の連体形。―た

16 奏^{そう}する事^{こと}を聞^きこし召^めし合^あはせて、世^よの政^{まつりごと}は行^{おこな}はしめ給^{たま}ひけれ。
給ふ尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる くれ 過去の助動詞「けり」の已然形。―た

（花山天皇は）「道兼は私をだまして出家させたのであったよ。」
といつて――。〈大鏡〉

「殿はあの松原へ――。わたくし兼平はこの敵を防ぎましよう。」
〈平家〉

この天皇（円融天皇）は、天徳三年己未三月二日に、――。〈大鏡〉

こちらの姫君と、北の方の姫君とで、――、ここ数ヶ月熱心に貝を――のだが、〈堤中納言〉

この大臣（菅原道真）が――漢詩に醍醐天皇はひどく感動なさつて〈大鏡〉

昔の帝は、老賢者たちが申し上げた事を参考になさってから、世の政治を――。〈大鏡〉

17 荒人神におはしますめれば、公も行幸せしめ給ふ。あらひとがみ おほやけ ぎやうかう たま

公帝・天皇 行幸 天皇の外出。ここでは参拝の意 給ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる

18 「勝たせじと思しけるらん。」と、上も笑はせおはします。か おほ うへ わら

上帝・天皇 おはします 尊敬の補助動詞。―でいらつしやる・―なさる・お―になる

19 「暫し。」とて、取りに入らせおはしまししかし。しば と い

おはします 尊敬の補助動詞。―でいらつしやる・―なさる・お―になる し 過去の助動詞「き」の連体形。―た かし 終助詞。―だよ

20 「常に参加るや。」と問はせおはしまして、「参り侍り。」つね まゐ と まゐ はべ

と申し候ひつれば、
おはします 尊敬の補助動詞。―でいらつしやる・―なさる・お―になる

21 (帝が)南殿に出でさせおはしまして回させ給ふに、なんでん い まは たま

おはします 尊敬の補助動詞。―でいらつしやる・―なさる・お―になる

22 「只今、此れより過ぎさせおはしますめり。」と答へけるとかや。ただいま こ す いち

過ぐ通り過ぎる おはします 尊敬の補助動詞。―でいらつしやる・―なさる・お―になる めり 推定の助動詞「めり」の終止形。―ようだ

(菅原道真は)靈験あらたかな神でいらつしやるようなので、(参拝するために)――。〈大鏡〉

「あなたに勝たせまいとお思ひになったのだらう。」と言って、――〈枕〉

帝は「ちよつと待て。」と言って、(建物の中へ)思い出の品を――。〈大鏡〉

宮が「いつも向こうに参上しているのか。」と――、私が「参上しております。」とと申し上げましたところ〈和泉式部〉

帝が紫宸殿(ししんでん)。宮中の建物の一つに――、こまを回しなされると〈大鏡〉

「たつたいま、この家の前を帝が――。」と答えたとかいうことだ。〈大鏡〉

23 上^{うへ}も聞^きこし召^めして興^{きよう}ぜさせおはしましつ。」と語^{かた}る。
興^{きよう}ず おもしろがる おはします 尊敬の補助動詞。―でいらつしや
る・―なさる・お―になる つ 完了の助動詞「つ」の終止形。―た

24 例^{れい}の、声出^{こゑい}ださせて隨身^{ずいじん}に歌^{うた}はせ給^{たま}ふ。

隨身 護衛の従者 給^{たま}ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる

25 此^これを徒^{ただ}に奉^{たてまつ}らば漫^{ます}ろなるべしとて、人々^{ひとびと}に歌詠^{うたよ}ま
せ給^{たま}ふ。 給^{たま}ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる

26 講^{かう}の終^はる程^{ほど}に、歌詠^{うたよ}む人々^{ひとびと}を召^めし集^{あつ}めて、今日^{けふ}の御業^{みわざ}
を題^{だい}にて、春^{はる}の心^{こころ}ばへ有^ある歌^{うた} 奉^{たてまつ}らせ給^{たま}ふ。

奉^{たてまつ}る 献上する・差し上げる 給^{たま}ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・
お―になる

27 惟光^{これみつめ}召^めして、御帳^{とばり}、御屏風^{びやうぶ}など辺^{あた}り辺^{あた}りしたてさ
せ給^{たま}ふ。

したつ 用意する 給^{たま}ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる

28 此^この国^{くに}に通^{かよ}ひける陰陽師^{おんやうじ}召^めして、祓^{はら}へせさせ給^{たま}ふ。
せ サ変動詞「す」未然形。する 給^{たま}ふ 尊敬の補助動詞。―なさ
る・お―になる

帝もこのことをお聞きになつて、
――。」と語る。〈枕〉

（屋敷内の女の気を引くため、門
の外で）いつものように、声を大
きく出させて――。〈堤中納言〉

この石をこのまま差し上げるの
もつまらないだろうと言つて、
（親王は）――。〈伊勢〉

法要に際しての仏法講話が終わ
る頃に、藤原常行が歌人たちを
呼び集めなさつて、今日の御法
要を歌題として、春の情趣があ
る歌を――。〈伊勢〉

（光源氏は）従者の惟光をお呼び
になつて、帳や屏風などを、あち
らこちらに――。〈源氏〉

この国に行き来していた陰陽師
を呼び寄せなさり、お祓いを――
。〈源氏〉

29

いにしへ 古の世々の帝、春の花の朝、秋の月の夜毎に、候
ひとびと ふ人々を召して、事につけつつ歌を奉らしめ給ふ。
奉る 献上する・差し上げる 給ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・
お―になる

古代の代々の帝は、春の花が咲
朝、秋の月が美しい夜には、仕え
る人々をお召しになつて、折々
の景色や物事にあわせて和歌を
――。
〔古今〕

30

はたけやま 畠山、家の子郎等 多く討たせ、力 及ばで引き退く。

畠山は、一族や家来を――、力及
ばず退却した。〔平家〕

31

ひらやま 平山は郎等を討たせて、敵の中へ割つて入り、やが
そ 其の敵討つてぞ出でたりける。 郎等 家来

平山は――、敵の中へ割つて入
り、すぐにその敵を討つて出て
きた。〔平家〕

32

じらう 弟の次郎 涙をはらはらと流いて、「唯兄弟二人あ
るものが、兄を討たせて弟が一人残り留まりたら
いくほど ば、幾程の栄華をか保つべき。ただ一所で如何にも
な 成らん。」とて、

弟の次郎が涙をはらはらと流し
て、「ただ二人の兄弟であるのに、
――弟の私が一人生き残つたと
して、どれ程の栄華を保てよう
か、いや保つことは出来ない。と
にかくこの同じ場所ですら死に
しよう。」と言つて〔平家〕

33

かじはら 梶原 涙をはらはらと流いて、「戦の先を懸けんと
おも 思ふも子供が為、源太討たせて、景時残り留まつて
なに も何にかはせん。返せや。」とて、又取つて返す。

源太 人名。景時の嫡男

梶原景時が涙をはらはらと流し
て、「戦の先陣を務めようと思う
のもわが子たちのため、――、こ
の景時が生き長らえても何にな
ろうか。引き返せ。」とて再び敵
の中へ引き返す。〔平家〕

34

はな 向かへの岸より山田次郎が放つ矢に、畠山馬の額
のぶか を簷深に射させて、弱れば、

向こう岸から、山田次郎が放つ
た矢に、畠山は馬の額を深く――
、馬が弱つたので〔平家〕

35

熊谷は馬の腹を射させて、頻りに跳ねれば、弓杖突
いて下り立ったり。

熊谷は――、馬がしきりに跳ね
るので、弓でつえを突いて地に
降り立った。〈平家〉

36

富樫の太郎は越中前司盛俊が放つ矢に首の骨射さ
せて、河中に真逆に落ちにけり。

富樫太郎は越中前司である平盛
俊が放つ矢に――、川の中に真
つさかさまに落ちた。〈平家〉